河のにおい

辻井 良

潮出版社

著者略歴

昭和9年，栃木県生れ。本名，佐瀬喜市郎。
石川県立大聖寺高校，フェーマス・スクールズ美術学院卒。第2回「時」新人小説賞受賞。
『范』『四谷文学』同人。プロダクション技術部長。

河のにおい

定価　九五〇円

昭和五十九年八月二十日　印刷
昭和五十九年九月五日　発行

著者　辻井　良
発行者　富岡　勇
発行所　株式会社　潮出版社
東京都千代田区飯田橋三―一―三
電話　東京(03)230〇七四一(販売部)
230〇七八一(編集部)
振替　東京　五―六一〇九〇
郵便番号　一〇二
本文印刷　大日本印刷株式会社
付物印刷　栗田印刷株式会社
製本　株式会社鈴木製本所

(乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします。)

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害となりますので，その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。
© R. Tsujii 1984 Printed in Japan

河のにおい／目次

虹の環 7
夏のプロフィール 19
顔の中 34
萩の風 46
海のひびき 60
ゲートル 72
河の花 80
大阪の夢 90
光る屋根 101

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

柘榴 114
百日紅の木の下 129
にやりすと 139
長方形の闇 152
ネクタイ 161
井戸端 167
銀杏の葉の蔭 181
微笑 190
あとがき 200

装画　畑農照雄
装丁　中島かほる

十七の短篇連作

河のにおい

虹の環

文天堂写真館にはＤＰ店と写場（しゃじょう）との二つの出入口があって、受付の右側はＤＰのショウ・ケースに面しており、左側は、写場の客が応接室に入ってくるときの通路に向き合っていた。入口は異なるが、客はどちらもはじめに受付に眼がはいるのだ。

この受付はまた板壁一枚を隔てて外部にも接していた。冬は隙間風が吹きこんできて寒かったが、そんなくらいだから表通りの物音はじつによく聞こえる。ことに、写真の見本を張り出してあるショウ・ウインドーが板壁のすぐ裏側にあるせいか、ここで立ち止まっていく人のささやきや息づかい、衣ずれまでが聞きとれた。

文天堂写真館ではショウ・ウインドーに名刺判や手札判などのごく小さな写真を数多く展示していた。おそらく常時二百枚ちかい写真を掲げていたのではないかと思う。全紙や

半裁といった大判の写真は応接室の内部だけである。そのせいだろうか、この表通りに面したショウ・ウインドーは人気があって、通行人はよくここで足を止めていった。ただなんとなく眺めていく人、自分や知人の顔を見つけて連れの者と興奮してしゃべりあっていく人など、さまざまである。まれには恥ずかしいから外してくれとねじ込まれることがあった。たいがい若い男性からだったが、それも一年を通していえば一、二件で、多くの人は自分の絵や習字が張り出された小学生のようにはしゃいでいった。文天堂写真館は駅前の繁華街から外れた運河沿いという立地条件の悪さを、この商法で補っていたのである。

ショウ・ウインドーのまえで立ち止まっていくのは女性が圧倒的に多かった。この日も早朝から若い女の話し声をいくつか聞いた。この子、実物よりはましね。眼がすっごくきれい。唇がちょっと野蛮なかんじかな。鼻が高いのは修整でなおしてんのよ、現物とはおおちがい……。そして笑いさざめきながら散っていく。これら街の声を総合してみると、文天堂写真館は修整技術で評判をとっているようであった。

DP店にも写場にも客が来ていないときは、受付の台でスポッティングをやった。焼付のとき気泡やゴミが印画紙に付くと、写真のうえに白い斑点が残るが、これを極細の筆の先に墨をつけて丹念に埋めていくのである。スポッティングに疲れるとガラス越しに表通りの車のながれを眺めたり、応接室の入口に架かっているモナリザの複製画にぼんやり目

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

を当てる。撮影の客がくるとスリッパを出して写場の方へ案内し、先生（主人）の助手をつとめる。そんな日々が四年間つづいていた。

その日は朝から風が出ていた。春先に関東一円を吹きまくる風は運河沿いに吹きぬけるのでこの辺りはとくにつよく、閉めきったガラス窓は終日ガタガタ鳴りつづける。すると、どこからともなく砂埃が舞いこむので、板の間はいくら雑巾掛けをしてもすぐザラついてしまう。そんな午すぎのことだった。

靴音が近づいてきて止まった。利夫はスポッティングの筆をにぎったまま耳を敧（そばだ）てた。話し声が珍しく男性だったからである。男は二人だった。DPの仕上がりを受け取りにくるには少し間がある時刻で客はいなかった。ひくくまわりこんだ陽が土間を煉瓦色に染めていて、彼らの乗りすてた自転車の影が歩道でながく延びていた。この女さ、という一人の声に、やったのか、と別の男がこたえる。ガラス戸が風で絶えず鳴りひびいていて聞きとりにくい。利夫は板壁にからだを密着させた。

「こんどはおまえの番だな」先の男が言った。「いいのか」「おれはもういい。もうたくさんだ」「無責任なやつだ」二人はかるい笑い声をたてた。「それにしてもこの写真はじつによく撮れてる、本人とは月とスッポンってとこだ」「こってり修整でなおしてるんだろ」はじめの男が言った。「ああ、鼻筋がきれいにとおってるもんな」「ちょっとしたブロマイ

ドってとこか」二人の声が途切れた。二人はだまって見あげているらしかった。「それじゃ、うまくやれよ。やつは姉貴と一部屋借りて住んでいるんだ。ええと、電話の呼び出しは……」一人が電話番号を言い、もう一人が控えた。念をいれて二度繰り返した。利夫はにぎっていたスポッティング用の筆でその番号を傍らの写真の切れ端に記した。聞こえてくるままに書きとめたのである。二人は間もなく立ち去っていった。

隣接する運河で曳き船の焼玉エンジンの音がしてくる。やがて、堤防のきわに繋留された丸太がひたっひたっと横波を返しはじめる。この運河は墨田と江東の両区を網の目のように切りきざんだ河のひとつだが、丸太を木場に運ぶ主線であるため曳き船に繋がれた筏やダルマ船がよく通った。風はあいかわらず間歇的にガラス戸を鳴らしている。利夫は写真の切れ端に書きとめた電話番号を眺めていた。だれかのうえになにかが起きようとしていた。

文天堂写真館に住みこんでからの三年間を振りかえってみた。平穏無事に何ごともなく過ぎさっていった日々である。昼間は受付で店番をしながらスポッティングをやり、閉店後は暗室で現像の助手をつとめる。その水洗した原板を写場のすみに並べて立てかけると十一時ちかくになり、急いで銭湯へいき、帰って寝床にもぐりこむ。そんな繰り返しでしかなかったような気がする。むろん平穏な日々に文句をいえた筋合いはなかった。住み込

むまえはそれまでいたガラス工場の工員を辞めていて、職安から斡旋されるパートタイムをつないでいく喰うや喰わずの生活であったのだ。食と住の心配がないだけでも夢のような日々といっていい。しかしその平穏のなかに或る満ち足りないものを覚えるのである。いま立ち去っていった二人の若い男の方が少なくとも生き生きと、一度しかない青春を過ごしているような気がする。

利夫はサンダルをつっかけて表通りに出た。あらためてショウ・ウインドーのおびただしい数の写真を眺めた。女性の一人写しは全体の半数ちかくを占めていた。そのなかから年齢的に対象外と思われる中年の十数人とセーラー服姿を除外した。それでもまだかなりの数が残っている。

「鼻すじがとおっている」「ブロマイドのような」からさらに七、八枚にまで絞ってみた。だが、そこまでだった。残りのどの一枚なのかは見当もつかない。その七、八枚に共通しているのは判が手札で、明らかに見合い写真用として撮った和服の上半身であることだ。利夫はショウ・ウインドーのまえを離れた。たとえ当の女性が分かったにしても、だからどうするというわけのものでもなかった。

一週間が過ぎた。その日の午後、板壁ごしに聞き覚えのある男の声を聞いた。

「この写真、できすぎだよなあ」「ああ、まあな」相手の声は笑いをふくんでいる。「でも

うまくいったよ」先の男が言った。利夫は椅子をそっと板壁に寄せた。「こんどはほかの連中にまわしてやるかな、紹介料をとってさ」「そんなもんとるのか？」「とる。それで山分けだ」ケッケッと二人は声を押しころして笑った。「心あたりがあるんだ。そいつに妹を押しつけておいて、姉の方を呼びだす。妹の名前をいってさ。この姉ってのは写真通りのちょいとしたいい女らしいぞ」「そううまくいくか」「やってみるわけよ」二人はまたひとしきり笑った。彼らは周りにだれもいないので気楽にしゃべっていた。

利夫はDPのケース越しに上体を伸ばして外を窺った。が、立っている二人の黒とカーキーいろのズボンしか見えない。いまの話を聞いてしまった以上、放って置けない気もする。他人ごと、といってしまえばそれまでだったが、写真をウインドーに掲示したことが勢みで起きたとすれば、何か手を打つくらいの義務はありそうにも思われた。

ふいに靴音がした。利夫が身を退くのと同時に外の二人が床音たかく入ってきた。二人は若かった。二十歳前後とふんだ。一人はひょろ高い上背を傾げて店内を舐めまわすように見ていたが、「焼増しを二枚ばかり頼みたいのだが」と言った。

「はい、お名前は？」利夫は平静を装ってこたえ、写場の台帳を引きよせた。

「いや、表のガラス戸に入っている写真の焼増しなんだ」男は外の方へ顎をしゃくった。不敵な笑いが唇の端にうかんでいる。

「と、いいますと？」
「上の列の右から、ええと、三番目の写真だったかな」彼はやや小肥りなもう一人の方を振り返って言った。「ほら、若い女が二人並んでいる……」
「二人？」
「一人は肘掛けにもたれて笑っているやつだ」
「二人とも笑ってるな」小肥りが言った。
「つまり他人の写真を焼増しするわけですね」利夫は台帳を音たかく閉じ、わきに押しやった。ショウ・ウインドーの見本写真から焼増しの注文を受けたのは初めてだった。「それはできないことになってるんです。撮影した本人か家族の方の依頼でないと」利夫は探るように二人に眼をあてた。
「どうしてもかいッ」
「はい、これは東京都の写真師会の決まりになっていますから」
しかしそんな規定があるのかどうかさえ知らなかった。写真屋のモラルとしてならあるに違いない。
「頭を下げて頼んでるんだがね、こっちは」ひょろ高い方が妙にねじくれた言い方をした。
「はい、ご足労でも写っている本人に来てもらうか、本人から直接電話をいただきません

と」

利夫は殊更ゆっくりと、言葉をえらんで言った。プイッとひょろ高い方の男が飛び出していった。小肥りはこちらを睨みつけていった。

二人の姿が見えなくなると利夫は受付の椅子にぐったりと腰を落とした。銀杏の葉の影が土間でちらちら揺れている。陽は写場への通路にも射しこんでいて、まわりの白壁で目映く反射し合っている。額縁のモナリザはガラス面で白壁を映しているせいか霧につつまれているように見える。

利夫は表通りに出てショウ・ウインドーの写真を眺めた。彼らが指定した「上の列の右から三番目」は縦位置に撮った手札判で、妹は据えつけの安楽椅子に深ぶかとからだをしずめ、姉の方はその肘掛けに腰を下ろして半ば妹に凭れていた。二人とも洋装だった。利夫がいつか七、八枚までに絞ったなかには入っていなかった。一人写しだと思いこんでいたのである。姉は「ブロマイドのような」という言葉通りの美人タイプだった。そして妹によく似ていた。丁寧ないくぶん厚めの修整がほどこされていて、それが整った顔立ちを引き立てていた。ふくよかな妹に較べると姉の方はやや線の細いさびしげな顔だった。

利夫はそのまま道をよぎって橋のうえに出た。運河の内部にうねりが出ていた。曳き船が通ったあとの余波である。うねりが押し寄せてくると、堤防のきわの杭に繋留されてい

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com